第１回　ダム等に関する情報提供のあり方検討会　議事概要

日　時：令和５年 11 月 20 日
場　所：富山県防災危機管理センター２階　中会議室

主な意見　（　　）内は項目分類

○受け手側の変化も考慮したような災害情報の提供のあり方、富山県型、富山型というものを出せていければ。（Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ）

○ＦＡＸでやりとりしていては時間がかかる。ズームやラインで一気に情報共有できるようにすべき。（Ⅱ）

○市町村が避難指示の判断を出すタイミングについて、氾濫危険水位だけでなく、異常洪水時防災操作（緊急放流）開始の段階でも検討してはどうか。（Ⅲ）

○サイレン吹鳴とスピーカー放送が通常の放流時と異常洪水時防災操作（緊急放流）時で同じ放送が流れるということは危機感がわからない。（Ⅲ）

○ダムがあるから下流は安心という意識はなくなり、住民から緊急時の情報伝達方法について、早く教えて欲しいと言う意見がある。（Ⅰ）

○河川だけではなく、地域住民に向けてもサイレンで警告を発することができるような、機器の設置や運用を考えてほしいと言う意見がある。（Ⅲ）

○ＳＮＳが使えない、防災行政無線も聞こえない高齢者の方に個別に受信機を貸し出しているが、すべての住民の方に伝えることはなかなか難しい。（Ⅲ）

○防災はスピードが大変重要なため、プッシュ型の情報を提供する仕組みが大事であり、課題でもある。（Ⅲ）

○異常洪水時防災操作（緊急放流）への移行が決定してから連絡するのではなく、空振りの可能性があってもダムの状況により異常洪水時防災操作（緊急放流）するかもしれないという時点で情報提供があれば、避難誘導のための指示を出す時間をもう少し取れると思う。（Ⅱ）

○第１報を早くいただくことは大変重要であるため、首長へのホットラインに加えて、市町村の災害対応職員に一斉連絡する方法があればよい。（Ⅱ）

○自治体のビジネスチャットを用いれば、組織が違っても同じ情報をすぐに共有できるのではないか。（Ⅱ）

○避難所の開設や避難指示のため、ある程度時間が必要であることから、降雨などの気象状況、ダムの異常洪水時防災操作（緊急放流）の予定の状況など、可能な限り早い段階で情報を示してほしい。（例えば避難判断水位や氾濫危険水位に到達するであろう予測時間）（Ⅱ）

○防災講座に出て来られない高齢の方への避難指示に関する仕組みの説明が課題。（Ⅰ）

○山間部の集落では低いところから高いところまで距離があるため、１軒 1 軒回ってのスムーズな避難指示の伝達が困難である。（Ⅲ）

○高齢者は避難に時間がかかるため、人命を守るために避難指示の方法について検討したい。（Ⅲ）

○ダムが異常洪水時防災操作（緊急放流）した際に下流でどういう被害が出るのかがわかる多重ハザードマップを作ってはどうか。（Ⅰ）

○市町村のタイムラインのチェック、ホットラインを危険な地区の防災組織単位まで届くように考えてほしい。（Ⅱ）

○本当に危ないところを特定し、ピンポイントでアラートを出すシステムを作れないか。（Ⅲ）

○河川管理者だけでなく市町村も受け取った情報をどう危険地域に分配するか考えてほしい。（Ⅰ）

○県内の市町村全体で情報共有し、情報伝達訓練を行うべき。（Ⅰ）

○早めの情報提供としてはキキクルがあり、洪水予測について、３時間先の予報が入るので、リードタイムをとるための参考情報としてチェックしていただきたい。（Ⅱ，Ⅲ）

○少人数でも何とか緊急対応できるように日頃からの訓練を県や防災士さんと連携し、実施すればよい。（Ⅰ）

○担当者への連絡手段はライングループとかでもいいのではないか。（Ⅱ）

○自治体のビジネスチャットを用いれば、組織が違っても同じ情報をすぐに共有できるのではないか。（Ⅱ）

○異常洪水時防災操作（緊急放流）が今後もあり得るということを前提に、最終的に住民まで情報がどのように伝わるか、その連絡体制を考えていただきたい。（Ⅰ）

○県民の方々の防災に対する意識向上と維持が課題。（Ⅰ）

○サイレンについて、派手な音とか、おどろおどろしい音とかを試して富山版を作ってもいいのではないか。（Ⅲ）

○緊急時に一刻も早く情報伝達することが必要。（Ⅱ）

○ダムがこういう操作（異常洪水時防災操作）をすると下流の河川ではどうなるのか、情報共有を図ることが大事。（Ⅰ）

○どのようなときに異常洪水時防災操作をするのか、平時から防災操作をすると何トンの水が放流されるのか、ということ　を事前に共有しておいてほしい。（Ⅰ）